

指定討論・質疑応答

○アチェアポン教授

ありがとうございます。改めまして阿部先生をお迎えいたしました。ようこそお戻りいただきました。それでは事前にいただいております質問についてお答えする努力をし、その後、フロアからも質問をいただきたいと思います。1時間ありますので、なるべくたくさん質問にお答えしたいと思いますので、先生方には回答はなるべく簡潔にお願いしたいと思っております。それでは阿部先生、ご質問の回答をお願いします。

○阿部教授

三つ質問をいただきました。一つ目はクラスサイズが大きい場合にアクティブラーニングはどう行かかというご質問です。大変いい質問だと思います。これはできればクラスサイズは30人以内ぐらいのほうが、より目が行き届くしいと思います。各国や各学校の事情があるので、50人、60人、70人になったりということはあると思います。

しかし私はそれでもできると思います。もちろんやり方を少し変えなければいけません。が、できると思います。

ちなみに私は大学で、大学院の担当ですが学部の授業で100人を超える授業を持っています。国語科教育関係の授業ですが、そこでも実は私は大学でアクティブラーニング型でやっています。100人を5人のグループで大体20グループつくって、そこで検討課題についてグループでディスカッションをさせながら、100人でまたディスカッションし、またグループでということをやっています。もちろん大学の授業は時間が限られていますから、毎時間たっぷりやるわけではありませんが、大事なポイントとなる授業の回では必ずそういうかたちにしてディスカッションさせながらアクティブラーニングでやっています。ですから小中高でも工夫をすれば可能だと思いますので、ぜひ試みていただきたいと思います。

2番目のご質問です。年間何日ぐらいアクティブラーニングの授業をするのですかということですが、確かに何日ということは申し上げられませんが、一つの学習が例えばある作品や文章を読むために仮に8時間かかったとします。そうするともちろん全ての時間をアクティブラーニング型というわけにはいきません。文章を読んだり、書いてあることの意味や語句をチェックしたりする時間はアクティブラーニングというわけにはいきません。しかし重要なところになってくるとアクティブラーニング型の授業が8時間の中でも増えてきます。初期の段階では、大事なところで少しだけアクティブラーニングをするけれども、だんだん生徒たち、子どもたちに力が付いてくると、子ども自身が考えてディスカッションし、追及する授業の割合が増えてくるので、だんだんとアクティブラーニングの回数が増えてくるというようにしていく。また、先ほど井上先生があったように、子ども自身、生徒自身

が問いを考えるようになると、嫌でもアクティブラーニングの回数が増えてきます。教師はまたそのようにしていかなければいけないと思います。

3 番目のご質問です。教員の中にリーダー（中心人物）がいない場合はどうするかということですが、もちろんそういうことはあります。そういうときは、やはり外部の力を借りる。これは日本もそうですが、秋田県では指導主事などという、教育委員会のアドバイザーがいますし、われわれ大学の教員もいます。他の学校にもアクティブラーニングに非常に長けた教員がいます。そういう人をゲストとして呼んで、そういう人を中心にしながら、アクティブラーニングを広げていく。そして場合によっては実際にそういう人に授業をしていただいて、アクティブラーニングをみんなで見ながら研修するということができますので、そういう場合は学校の中だけで閉じないで、開いて、さまざまなゲストを呼びながらアクティブラーニングの力を付けていく。これは秋田だけではなく、日本でもそういうことは行われていますし大変効果が上がっていると思います。少し長くなりましたが、以上でよろしいでしょうか。

○アチェアポン教授

それでは他にもご質問はありますでしょうか。他の先生へのご質問がありましたら。

○井上教諭

灘高の井上でございます。わたくしのほうには 2 点のご質問をいただいております。まず一つ目は、今日はわたくしは国際バカロレアの IB の話をしましたが、IB はそもそもエリート教育で万人向けではないのではないかとのご指摘です。それから二つ目は全員が学ぶべき学習の到達点（コンピテンシー）が各国それぞれの状況によってあるのではないかと、おそらくこれは評価の問題ではないかなと思います。

まず一つ目の IB はエリート教育で万人向けではないかというご指摘ですけれども、おっしゃるとおりだと思っております。例えば日本の学校の全部が IB 校になってほしいとは、私も全く考えておりません。ただ私がしたいのは、発表の中で申し上げましたけれども、灘がエリート校だから IB を採用しようという、そのような発想でやっているわけではないということです。

私の前任校は大阪の千里インターナショナルスクールという学校でしたが、そこから灘へ移ったので、研究を継続していた関係で TOK をやっていますが、おそらく千里から全く違う、例えば困難校に異動になったとしても、TOK はやっていたのではないかなと思ってます。現に TOK というのは日本のいう学力でいうところの偏差値が 50、40 を切るような学校でも普通に実施されています。賢いかそうでないかという問題ではなく、私が申し上げたかったのは TOK を取り入れるということが、自分が持っている日本の公教育的なスタイルをある種、自分から切り離して相対化していく感じで、何が足りていないのか、何かい

いところなのかということを理解するための一つの鏡として使っているということです。実際、批判的思考力を日本の国語の授業の中で伸ばす体系化された手法はあまりありません。そういう意味では質問づくりであるとか、TOKの問いかけというのはものすごく参考になるという思いがあります。

二つ目の評価の問題ですが、ごめんなさい、今日は時間がなくて踏み込んでお話ができませんでした。IBOの実際のTOKの評価というのは、スライドにもお書きしましたが、外部評価IBOに実際に原稿を送るといったものがあります。これはTOKエッセーといいまして、1500ワード、日本語で3000字ぐらいのエッセーを、問いを自分で立てて、なぜその問いが立ったのか、それに対して自分はどうアプローチしたのかということをして3000字程度にしたためて送るといったものがあります。これが40点です。

それから学内の評価もあり、インターナルアセスメントといいますが、プレゼンテーションで、生徒がなぜその問いを立てたのかということをして、学内の教員を前に発表します。これは20ポイントです。ただこれはIBのスタイルであって、1クラス55名の灘校ではできませんので、それをどう組みかえるのか、その一つの案として講座を利用しながら問い立てのプロセス自体を評価する。評価の観点については、別途またループリック等、つくっているものがありますので、興味がありましたらお声がけください。

○アチャポン教授

ありがとうございました。それでは国枝さまへのご質問もあるようですのでお願いします。

○国枝専門員

ありがとうございます。質問を整理しますと、三つに整理できるかと思えます。一つ目は学校教員だけでなく、保護者をどう巻き込もうとしているか。二つ目が各国によって教員の質の向上やサポートに、地域が取り組んでいる事例というのがあるのか、および、教員の質の向上はどれくらい重要と考えているか。三つ目は、いつかまとめさせていただきましたが、民間企業を巻き込む取り組みのコツや、どんなことができるのかということところです。

順にお答えします。まず一つ目の保護者をどう巻き込もうとしているのかということですが、まず保護者や地域の方ができる活動はあまり多くはありませんが、少なくともいえるのは授業の中で先生をやるわけではないことは確かです。どんな活動があり得るのかと申しますと、まず先ほどお話した補習活動においては、例えば補習の場所を提供するとか、教材が必要なときに教材購入を手伝うとか、補習自体を見守る。ファシリテーターと呼びましたが、必ずしも教員資格を持っていなくても、子どもがその場にくるかどうか確認するとか、ドリルを使っている場合は丸付けを手伝うなど、最低限のサポートをするのがファシリテーターに期待される役割です。必ずしも教員の資格は必要ないところで、保護者で関心がある人、時間が提供できる人に協力してもらおうということです。

それ以前にまず全般的に教員のサポートを保護者に期待しています。アフリカでいくつか見てきましたが、学校によっては実際にへき地に派遣されている教員のために宿舎をつくったり、食材を提供したりとか、そのようなことを保護者や住民がやっているケースは結構多いです。教員が教員として仕事ができるようにサポートすること、また、教員じゃなくてもできることを授業の外でやっていくことが保護者・住民巻き込み型の活動の中身になります。

これもそれを実行するには、それが必要だという意識を持たないといけないので、先ほどはあまり詳しくお話はできませんでしたが、まずは活動を始める前にテストをやり、子どもたちがどれだけ学んでいるか、分かっているかいないのかをまず結果として示し、うちの子たちはこんなにできていないのですということから、必ずやるようにしています。それによって、保護者や地域の人が、これはまずい、何かしなければという思いを持つというところが非常に重要なステップになります。

二つ目の質問は、教員の質の向上の取り組みですが、基本的に、私どもの「みんなの学校プロジェクト」の取り組みでは、今お話したような、学校運営委員会の枠組みの話や、委員会としてどんな活動をやっていけるのか、また補習の話も、教員も対象で研修はしておりますので、教員を排除するということは一切なく、むしろ教員には関わってほしいと思ってやっています。ただ教員だけにそれを押し付けることはしないということです。活動している全ての国において、教員だけを対象に研修しているのではなく、あくまでも学校運営委員会のメンバーの1人としての教員を研修しています。

補習活動については、教員であれ、保護者や地域のボランティアであれ、補習活動を見守るに当たってのコツのようなものをお伝えするとか、教員ではない方がファシリテーターをやっている場合に、どうしても自分の担当の子どもが、足し算の繰り上がりが難しいといったときに、教員が相談にのるなど、教員と住民の間でも交流の場ができることで、教員だけでなく、みんなで学習サポートができるという話を研修の中で取り上げたりしています。

教員の質の向上についてはどれくらい重要かと考えているかということですが、非常に重要だと考えています。わたくしども「みんなの学校プロジェクト」といわれるアプローチに限っていいますと、基本的に子どもが学べていないという状況に対し、どんなアプローチが取れるかというところで、一つは長期的に、例えば、教員研修を通じて将来的に授業を変えていくというのは、もちろんあると思っています。そのためにはカリキュラムや教科書に手を付けるといったことが必要になるので、長期的な取り組みが必要だと理解しています。

他方、それは非常に時間がかかるプロセスですので、今ここでできることをやっていかないと、国によっては毎年、人口増加率が3%を超え、20年くらいで子どもが2倍に増えていく中で、そういった子たちにも機会をきちんと与えるために、今できることを今ある人たちでやっていくと。つまり教員だけではなくて、保護者も地域の人もみんなでやっていくということを考えています。教員の質の向上は非常に重要だと考えているということは強調しておきたいと思います。

最後に民間企業がどのようなかたちで取り組めるか、関われるかということについては、すみませんが、個人的に私自身はしっかりしたお答えは用意できませんが、まずはこういった学習の危機があるということや、アフリカでは確かに携帯電話は普及していますが、インフラや電気の問題もありますので、例えばタブレット端末に学習ソフトを入れてみんなに配れば自動的に学習が改善していくという状況ではないということをご理解いただいた上で、どんなことができるのかということ、一緒に考えていただければいいかなと思います。例えば学校レベルの情報収集というときに、なかなか中央政府から学校レベルに至る関係者がきちんと連絡をとりあえる体制になっていないところが多いので、携帯のアプリなどで、情報共有が何とか活発にできるようになるといいと個人的には思っています。すみません、お答えになりませんでした以上です。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。皆さまからのお答えをありがたく存じます。それではこの場で、他にご質問がありましたら、挙手をお待ちしたいと思います。マイクをお待ちください。お名前とご所属をお願いします。

○野田教授

JEF for SDGs. Q & A ○野田准教授（茨城大学）

ありがとうございます。参加者の多くが日本語話者と思われるので、僭越ながら日本語で話をさせていただきます。茨城大学の野田と申します。二つ質問をさせていただきます。SDGs ということですので、もはや途上国支援だけの話ではなく、グローバルな開発目標と理解していますので、できれば日本の先生方と、JICA の国枝さんはどちらになるのでしょうか、途上国のことをやっている方で、お一人ずつどなたでも結構ですのでお答えください。

まず一つは「質の高い教育は誰のため、何のためか」ということです。今、国枝さんが発表されたように、みんなが同じ方向を向いている分には問題ないです。ところが、これは日本のケースですが、私は大学で教えていて、実際に肌で感じますし、数字でも分かるのですが、果たして日本の大学生は、アクティブラーニングに象徴されるような主体的な学びを本当に望んでいるのか。それが彼ら・彼女たちのニーズなのかというと、「うーん」と考えざるを得ない。例えば、ベネッセ研究所さんの統計によれば、2008 年と 2016 年を比べたときに、「あまり興味がなくても単位を楽に取れる授業がよい」という学生が 10 ポイント以上増えていて、逆に「単位を取るのが難しくても、自分の興味がある授業がよい」という学生は 10 ポイント以上減っていると。私たちが一生懸命アクティブラーニングをやっているのは何なんでしょう？、と少し残念な気もします。主体的な授業よりも講義形式の一方通行がいいという学生が 8 割で、この間、全く変わっていない。

こう考えたときに、アクティブラーニング、質の高い教育といったときに、一体私たちは、ポリシーメーカー、学者、教育者は皆さんがおっしゃっているような主体的な学びを推進す

る方向で頑張っていますが、他方、当の学生や、場合によっては保護者さんも受験に受かれ
ばいいとか、そちらの方向のマインドセットは全く変わっていないのではないかと、むしろ少
なくとも学生に関しては悪化しているのではないかと思われますがいかがでしょうか？

質の高い教育をめぐる、こうした傾向は例えば途上国でも同じことがいえるのではない
と思います。例えば、ICT、STEM や産業人材育成というよりも、明日どうやって農作物を
作るのがいいとか、もっとライフスキルのほうを学びたい、教えてやってほしいとお考え
の人もいるかもしれない。誰のニーズに対してどういう質の高い教育を提供するのかとい
うは、大きな問題だと思うのでお願いします。

もう一つ、これも大問題だと思いますが、今日は SDGs ということで、釈迦に説法です
が、SDGs のもとは Leave no one behind (誰一人取り残さない) です。これはわが国の人
間の安全保障の考え方をベースにしていると思うのですが、では今の日本においても、先ほ
ど話にでました教育困難校のお子さんもいらっしゃいますし、発達障害の子もいらっしゃ
ると。移民の方もいれば、今や日本には約 250 万人の在住外国人がいる。こういった一尾
を取り残さない為にどうするのかと。途上国に行けば、私はカンボジアのことを勉強してい
るのですが、ものすごい数の子どもたちが児童労働として働いていますし、場合によっては
ベトナムやタイへと国境をこえて働いています。アフリカはどうなんでしょうか。こういっ
た観点から、「だれひとり取り残さない」教育と「質の高い教育」についてどのように考えた
らいいのか。できれば SDGs なので日本の方と途上国の方、それぞれお一人ずつお答えく
ださい。ありがとうございます。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。大変重要な質問を頂戴したと思いますので、まずは阿部先生と井
上先生、それから国枝さんをお願いいたしまして、その後、わたくしの同僚と呼べる海外か
ら来たスピーカーをお願いしたいと思います。では阿部先生、よろしく願いいたします。

○阿部教授

私は今、秋田大学にいて、秋田県の教育をよく見ているのですが、実は秋田県の子どもた
ちは探求型といいます、アクティブラーニングの授業がとても好きです。実は、これが私
が中心になってまとめた学校改善新プランとあって、全国学力学習状況調査の秋田県の結
果を分析した結果ですが、毎年出しております。この 10 年間で秋田県内でアクティブラー
ニングの授業の割合がどんどん増えています。

もともと多かったのですが、まだ必ずしも全ての学校でなかったのが、この 10 年間で
どんどん増えてきて、現在ではほとんどの小中学校でアクティブラーニング型の授業をして
います。この 10 年間、小学校 6 年生、中学校 3 年生で、国語の授業、算数数学の授業が好
きだという子どもが、どんどん右肩上がりで増えています。それから授業が分かるという子
どもも増えています。

ですからもちろんやり方にもよると思いますし、さまざまなデータがあると思うのですが、アクティブラーニングの授業というのは、子ども自身、すごく高揚しますし、分からなかったことが、だんだん分かってくる。ハードルを越えて高いものが見えてくるという実感があるので、やり方にもよりますが、秋田県では少なくともそういう状況があります。

やはり秋田大学の学生に聞いても、自分たちで考えてディスカッションする授業がいいと言ってきていますので、学生の趣向、地域、専門とか、大学の状況によっても違うと思いますが、やり方の問題もあるのかなという気はします。ですからこれからさまざまなデータを取って、学生たちの思考はもっとリサーチをしていかなければいけないのですが、極めてわずかなデータで申し訳ありませんが、私の実感としては、アクティブラーニングは小学生、中学生、高校生、大学生にとってもすごく知的な刺激を得て、支持されていると私は感じております。ありがとうございます。

○アチェアポン教授

阿部教授、どうもありがとうございました。では国枝さま、何かおっしゃいますか。

○国枝専門員

ありがとうございます。では私からも日本のことを、別の立場でお話したいと思います。まず、私の息子の中学校がこの2年間、東京のある区の研究奨励校ということでアクティブラーニングを導入して、ついこの間研究発表会が行われました。そこで私も授業を拝見し、アクティブラーニングが非常に積極的に取り入れられようとしている様子を目の当たりにしました。

その中で、私の息子に感想を聞きましたら「いつもこの授業だったらいいけれど」と話していました。つまり、それが慣習として定着していくためにはしばらく時間がかかるだろうということでしょう。どういう授業であれば楽しいのかということを生徒自身が感じ、その反応を教員も間違いなく感じたはずです。研究発表会をきっかけに、その後もそのような取り組みを続けていくことが非常に重要だと思いました。

あとは私の発表にも少し関わりますが、何かを続けていくためには必ずモチベーションが必要だと思います。そういったときに、教育の効果自体というのはひょっとしたら長い何年もかからないと出ないのかもしれませんが、アクティブラーニングや何かアプローチを導入したことで、教員であれ、生徒であれが成果を実感できるような、定期的な評価ができると、次のモチベーションにつながっていくと、それは途上国の活動についても同じだと思っています。以上です。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。マイトリーさん、ラシェッドさん、何かこれに対して付け加えたことはありますか。

○インプラシッタ教授

そうですね、私の経験から申しますと、アクティブラーニングの用語の旗印のもとでも、先ほども言いましたが、フォーカスを当てるべきは、やはり生徒の考え、アイデアだと思います。特に数学を教えるときにこのプロジェクトを始めたのは15年前ですが、通常、先生というのは単に中身を教えるだけ、伝えるだけでした。しかし、そのときに当たりまえだと思っていることがありました。学生の側、生徒の側がいろいろ問題を持っていたのです。例えば先生が配布をし、そして受け取る側の生徒には差があります。日本でいろいろと学ぶことがあったのは、それぞれ、いろいろな問題がありますが、その状況は例えば生徒と関わり持つと、個別の問題に対応することができると思います。何が問題なのかが分かれば結局、解決につながると思います。これがまさに、内容をより高いものにしていくことにつながっていくと思います。

例えば9+4という算数があります。「9+4は何だと」いうように単に算数の問題として出すと答えは何だということにばかり目が行ってしまいますが、その4を分解してそのうちの1を9に足すと10になって、残りが3だと。あるいは9から6だけを持ってきて、4と合わせて10になるからというような仕組みを理解することができれば、指を使っても何でもいいのですが、いずれにしてもその子の視点に立って個別に対応してあげることが大事だと思います。いずれにしてもアクティブラーニングの持つ意味はそういったところにあると思います。何もこれは教室、生徒の人数とは関係ないと思います。例えば、タイの場合は逆に1クラス10人、15人しかいません。その少数に対しても一方的に先生がプリントを渡すだけになってしまうこともある。だから、やはり大事なのはそういうところだと思います。

言い方が分かりませんが、メタ認知のレベルで内容を見るというのが20世紀型から21世紀型に変わったのです。ですから大事なことは、私たちあるいは教師が、現実世界に近い問題提起をすることができれば、例えば、日々の生活に落としこむことができるような問題の出し方をすれば、また違ってくると思います。でもどうしても算数は算数というように最初から構えて説明をして教えるということがあり、応用はその先ですが、そうではなく逆にして、応用の部分を現実に即した問題の設定をして問いかければ、また違ってくると思います。そのようなことを15年ほど取り組んできました。

○アチェアポン教授

ありがとうございました。では他のご質問はありますか。では後ろの方、どうぞ。

○黒田教授 広島大学名誉教授

もと広島大学におりました黒田と申します。20年近くJICAを中心として途上国での、特にクラスルームの授業改善というようなプロジェクトに、教科の専門家ではございませ

んが、特に理数科教育の専門家の方々と一緒に参加させていただきました。先ほどアチェアポン先生もおっしゃいましたように、日本の学校での実践は今日のテーマである SDGs の議論に大に関わるものであると思いますので、できるだけこれら二つを関連付けるようなご質問させていただきたいと思います。

私の理解では大きく分けて二つお話があったように思います。一つは阿部先生、井上先生からアクティブラーニングその他、日本のある意味、こういう言葉を使ってよろしいのか分かりませんが、先進的なクラスルームアクティビティの実践、あるいはその研究について、非常に興味深いお話をいただいたと思います。ただ、もう一方ではアチェアポン先生や JICA の国枝さんからは、途上国の教育には非常に多くの問題を抱えているという実情もお話をいただきました。例えば、アクティブラーニングといったような新しい考え方がその国に入ってきたときに、エイリアン、よそ者という意味ですけれど、エイリアンということだけで排除してしまうということや、あるいはそういう実践を行うための準備、クラスサイズの問題だけではなく、先生にモチベーションがないとか、そもそも教員室がなくて、先生同士のコラボレーションができない等々、数々の問題があるということです。そこで私の質問です。そのような日本の優れた実践を途上国の中に取り入れるときに、いっぺんに持つていくということは私の経験からも非常に困難です。先ほど言いましたエイリアンという感覚、押し付けられたという感覚もあります。そういうときに最初の手がかりは何だろうか。いっぺんに「これみんないいですよ、どうぞ」という話にならないと思いますので。これは日本の先生方と、インターナショナルパティシパントの方々の両方からお聞きしたいと存じます。極端な例を一つだけ申し上げますと、あるアフリカの大学の研究者で、「日本からそんなものを持ってきてもこの国では絶対だめですよ」とはつきりおっしゃった先生もいらっしゃいました。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。大変興味深い重要な質問だったと思います。ではいくつか私のほうからお話をして、他のパネリストの方からもコメントをしていただきたいと思います。このアクティブラーニングが機能して効果的だという十分なエビデンスがないという問題があると思います。ですからどうやってこれをスキルアップしていくことができるのか、インパクトがあるものにしていくことができるかを自問自答するべきです。日本だけではなく、そして地域社会の生徒のモチベーションも違うかもしれません。また、これを受け入れるかどうか先生側の問題もあると思います。ですから時に少し立ち止まって考えてみる必要があると思います。

アフリカにおいてはリスクがあるわけです。こういったアクティブラーニングの教授法また別のアイデアは、この地域のコンテキストに合わせてつくられたものではないと考える、そういう見方があるわけです。ずっと同じ古い質問ですが、どうやったら生徒や教師やこれが効果的だと、アクティブラーニングを受け入れることができるようになるのでしょ

うか。60年代にアフリカにおいて、アクティブラーニングというのが必ずしも目新しいものではありませんでした。歴史をさかのぼってみますと、いろいろなかたちをとってアクティブラーニングというのをやっていたのですが、何年たってもこれに反発してしまって根付いてこなかったわけです。これは問題だと思います。

ですので、何とかそういったところから、私のプレゼンテーションでもあったように、そこからメリットを受けられた人は、社会的、経済的な資本がある人たちは、こういったアプローチに共感をしていくわけですが、こういったものを何とかして教師や生徒に対して世界中においてアクセスできるようにしなければいけません。先進国だけでなく、全ての子どもが恩恵に資するようなものにできればと思います。私からは以上になります。他の方はどなたかコメントされますか。チョウドリー先生、お願いします。

○チョウドリーヴァイスプレジデント

アチェアポン先生がおっしゃったことに共感します。特に学問の世界にいる人、教育の実践者にとっては、このアクティブラーニングは素晴らしいモデルだと思うわけです。しかしこのようなモデルは、いろいろ他国でも試されています。私たちの国では、2004年、2005年に、DIFDの支援によって、モンテッソーリメソッドの教授法に基づいて、ある主流な小学校で試しました。こういった主流派の私立の学校では機能しました。彼女は12年の経験があり、またトレーニングを受けている教師が始めたからです。彼女の夫がPh.D.をとったときにイギリスでそのような経験がありました。それを始めたときに人気を博しました。そのあと何が起こったかといいますと、他でもあることだと思いますが、中から反発が起こりました。教師の負担が増えると見られて、主流派の学校やユニオンが反発を起こし、うまく行きませんでした。

あとはもう一つ申し上げたいのは、多くの援助機関はあまりにもプロジェクト思考です。プロジェクトが終わるとプログラム自体がなくなってしまう。これでは持続可能ではありません。そういった傾向が続いています。レビューがあっても、いい結果が出ていても、こういったモデルを地元にあったかたちで採用していくということ、地域社会や両親も関与させていくことが現場で機能することだと思います。特に初等、中等教育では機能してくると思います。しかし、他国でも同様の状況があると思いますが、外から押し付けられても、あまりうまくいかないかもしれません。

○アチェアポン はい、どうもありがとうございました。では、日本のパネリストの方にも、もう一度回答をお願いしたいと思います。国枝先生からお話しいただけますでしょうか。アフリカで仕事をされた経験もあると思いますので、このアイデアを他国にどのように適用できるかということについてお願いします。

○国枝専門員

ありがとうございます。これはいろいろな異論はあるかと思いますが、私自身、アフリカ

のプロジェクト業務に15年以上関わってきていますが、そこで注意してやってきたことは、基本的に、日本からに限らず、アフリカの他国でやっていること、何か新しいものを取り入れるときに注意したことは、まず押し付けにはならないように。それ以前に、自分の国の子どもたちが、どのような学びのレベルにあるのか問題意識を持つことです。まず、例えば算数が5年生でも繰り上がりのある足し算ができないではないかという問題意識を持つところから始める。始めた上で、何が足りないのか議論する。

それについて他国あるいは日本ではこういう取り組みがなされているけれど、やってみない？ という話をします。いきなり最初から政策に入るといえるのはありえないと思いますが、まずはパイロットでやってみて、成果が出たらそれを広げていけばいいし、成果が出なければ、この国では効果がなかったということで諦めればいからということで。せっかくプロジェクトをやって、何か革新的なアプローチを持ち込めるチャンスがあるのであれば、まずはそこにいる関係者の信頼関係のもとで、問題意識に基づいてやるということ、私はいくつかの国で実践し、それなりに成功はしてきていると思います。

ただ、本当に慎重にやらないと「この国は日本ではない、この国はどこそ国ではないから、お前の言うことは聞かない」と言われてしまうので、そこは慎重にやる必要はありますが、問題意識をしっかり持って共有すること。それからまずパイロットなので、いきなり政策ではないからやってみようという信頼関係のものでやっていくことが大事だと思います。

○アチェアポン教授

ありがとうございました。ではさらにご質問はありますか。では阿部教授、お願いします。

○阿部教授

黒田先生のご質問ですけれど、一つ答えさせてください。先ほどから議論になっていますが、私は実は、日本や秋田県のような状況とか、地域限定で基調提案したつもりはありません。アフリカなどの識字率や就学率が低い地域でも、アクティブラーニングというのは、これからどんどん取り入れていけると思っています。まずは識字率・就学率を上げて、その次にある程度できたらそれからアクティブラーニングという二段階論でやっていただいてもできない。私は就学率・識字率を上げつつ、アクティブラーニングはできると思っています。もちろんその国の先生方、子どもたち、保護者が受け入れなければいけないので押し付けてはいけませんが、しかしやってみると極めて効果的だということが分かれば、広がっていくと思っています。

もちろん、日本でも秋田でもそうですが、下手な対話型をやっていると時間ばかりかかります。それなら先生が丁寧な説明を30分したほうが分かりやすいということは、一方での真実です。しかし、より深いディープラーニング、批判的思考力、メタ認知能力、仮設設定力、問いをつくる力に関わるような学力を付けようとすると、どうしても教師の一方的な説

明で分かればいいということでは、子どもに力が付いていきません。そういう点では必然的にアクティブラーニング型の授業が、今後は国を超えて必要になると思っています。

では、どうすればいいか。一番手っ取り早いのは、そういうことができる教師がその国に行って、同時通訳で授業をすればいいと思います。実は私自身、やっています。国はいくつかあるので、今は申し上げますが、秋田県もやっていますし、私自身も講演で海外に呼ばれたときに、うちの付属小学校の先生と一緒に連れて行って、算数や国語の授業を同時通訳でやっています。子どもは目が輝きます。そうすると先生方もそれを見ていて、何でうちのクラスの子は、こんなに夢中になるのかということ、アクティブラーニングはどうやってやったらいいのかと質問がきます。そういうやり方もあるのではないかという気がします。もちろん、識字率・就学率の問題は大変な差別の問題ですから、早急に解決するのですが、私は段階論ではないと考えています。

それからもう一点、チョウドリーさんがおっしゃったことに大変共感するのですが、やはり少し行ってプロジェクト型でやると、そのプロジェクトが終わると、終わってしまいます。そうではなく、アクティブラーニングをつくるための教師の共同研究システムや、そのような授業力を上げるためのシステムを、その国に合ったかたちで構築するような取り入れ方をしていかないと、そのプロジェクトが終わったらまたもとの講義型に戻ってしまうということがありますので、プロジェクト型ではなくて、もっと構造的に教師を育てるような共同研究システムをつくっていく必要があると思っています。

○アチェアポン教授

ありがとうございました。

○インプラシッタ教授

わたくしも経験があるので、よろしいですか。日本の授業をタイでここ15年の間に導入してみようと取り組んだことがありました。私が阿部先生のおっしゃるとおりだと思うのは、私も長期計画を立て、30年計画で2000年頃から始め、現在15年間がたって計画の途中ですが、われわれの学部レベルの学生たちを対象に育成し、その学生たちが大学教員になって学校をサポートできるようにと思っています。

日本のような専門家がないので、こういうプログラムを始めたのは2001年、2002年頃でしたが、オープンエンド問題、つまりイエス、ノーで答えられないような問題を問いかけるということをしてきました。

そして2006年から全体的な学校としてのホール・スクール・アプローチとなり、学校のカルチャーそのものを変えようと、学校レベルで体系的にこれを導入しようと考えました。授業のやり方は日本とは違いますが、例えば1週間単位で回しながら、学校のカルチャーを醸成しようとしていきました。そして、このチームが学校で授業を行い、週の終わりに学校の校長先生に評価を聞きました。最初はあまりうまくはありませんでしたが、だんだん良

くなり、始めた頃の12年ほど前は100点のうち13というスコアでしたが、それが17に上がりというように、良くなってきました。学校の数も、2から4、それから22校、そして15年たった今や100近い学校で実施されるようになりました。ですから、プロジェクトだけではなく、これを自分の国でどのように展開していくのかをよく考えることが大事だと思います。

○アチェアポン教授

ありがとうございました。手が挙がっていますね。質問でしょうか。

○市野敬介氏（企業教育研究会）

わたくし、NPO法人の企業教育研究会の市野と申します。私は三つの仕事をしていまして、一つは、いろいろな企業の方を学校教育に巻き込んで出張授業のプログラムを作るとか、企業のCSRや広報の予算で教材を無料で配布する活動を、日本の学校に向けて、学校からはお金をいただかないシステムでやっています。

例えば新聞記者が学校に行って、新聞の書き方を国語の授業で教えたり、ゲーム会社に来ていただいて、中学校の数学で関数が実はプログラミングにつながっているというような授業をやったりですとか。あとはIBMさんと一緒にビッグデータを扱う統計の授業をやってみると、実はこれIBMのデータサイエンティストが使っているということで、学んだことは最終的には社会とつながっているということを教えることができるので、企業の方に社会貢献として、いろいろな学校教科に入っていただく授業のプロデュースやコーディネートをしています。

二つ目の仕事は、私は千葉県にいますが、千葉県のいろいろな学校の周りのステークホルダー、いわゆる地域の大人、保護者ですとか、あとは地域の中にある企業の方や、民間方がどう関わっていくのか、それによって教育活動がどう良くなっていくのかということについて、千葉県の教育委員会の方と一緒に教育政策を考える仕事をさせていただいています。

三つ目は、長岡造形大学の非常勤講師をやっている、デザイナーを目指す子どもたちにディベートを教えるという、まさにアクティブラーニングを100人単位の授業でやっていて、エビデンスを私も申し上げますと、100人単位でアクティブラーニングをやると、手前みそですが、生徒からの評価は他の授業に比べてものすごく高いので、もう一つのエビデンスとして思っただけであればいいと思います。

お伺いしたかったことが、二つあります。一つ目は、これは阿部先生もしくはインプラシッタ先生に先ほどおっしゃっていただいた、メタ的認知をするということが結構大事であることや、現実世界や現実社会と学びがつながっていることがすごく大事だということをお伺いしました。私たちがいろいろな企業の方や、いろいろな学校の外にいる方に関わっていただくときに、では今度どういうメッセージを発信していったらいいかというときに、皆さん

がやっぴらっしやる活動、メタ的認知を助けることだとか、現実社会につながった学びを提供することができるので、今回 SDGs が求める SDG4 にとても貢献している活動だというメッセージをはっきりと打ち出していったほうがいいのかについて、お伺いしたいということが一つ目です。

二つ目は、保護者の巻き込み方、保護者の役割ですが、子どもたちが勉強してきたことを家に帰るときに今日は何を勉強してきたのか話をしながら、「それはではこういうところに使えるね」とか、「今日はこういうことを学んだんだね」という家庭の中の会話もメタ認知の一つだと思います。秋田県ではそのようなかたちで親子が関わっているのですが、そういうことも含めて、社会が求めている、SDGs が求める教育の資質を上げる活動にみんなが貢献しているんだというメッセージの発信の仕方ができるのかどうかというのを、お伺いしたかったので質問させていただきました。一般の企業の方について、そして保護者の関わり方について、SDGs が求める教育の質を上げる活動に貢献するかどうかという観点で、そういうメッセージを出していいかということで、教えていただければと思います。よろしくお願ひします。

○アチェアポン教授

ありがとうございます。とてもいいご質問だと思いますけれども、パネリストのどなたかでお伺いにお答えくださる方はいらっしゃいますか。メタ認知やあるいは現実世界での経験とのつながりとか、親の関わりということだったと思いますが。

○インプラシッタ教授

私は実はメタ認知関連の論文を書きました。筑波大学に留学していましたが、学生たちが、認知のためのツールを認識することによって、あとになってそれが使えるということは、とても重要だと思います。先ほども言いましたが 9+4 というのは難しいのです。やはり計算というように見て 9+4 は 13 で終わるのですが、でも 9+4 の意味をちゃんと理解すること、そのためにはツールが必要です。つまり、このメタ認知というのが重要な役割を果たしています。生徒がどうしたら数を分解して、あるいは足し合わせて、指を折りながら計算するのではなく、きちんと意味が分かった上で次の問題にもそれを応用できるということだと思います。

それから現実世界とのつながりということですが、とても役に立つと思います。現実とつながっていると思うと意味が見えてきますので、大事だと思います。結局、いずれツールが必要になるわけです。それがメタ認知の役割だと思います。

それから両親がどう関わるかということですが、タイの場合は、140年ぐらいの歴史がありますが、教授法をどう改善するべきかということで、授業の質そのものではなくということが大事だと思います。つまり、そのサイクルというのはある意味メタ認知のレベルです。通常は途上国、タイのような国の場合は先生は教えるけれども、ただ単に教えるだけで、高

い次元でものを考えていない。この高いところが大事なわけです。きちんと授業計画をして、ちゃんとそれをオブザーバーで見てくれる人がいて、あとで振り返って改善をすることができる、そういうかたちが必要だと思います。

例えば授業参観日があれば親も来てというかたちで、その親が授業を参観すれば、こんなふうに教えているんだ、こんなふうに参加型なんだ、随分変わったなというふうに思えると思います。そういったかたちでプロジェクトでやっていけたらと思います。

○アチェアポン教授

一つ、申し上げたいことがあります。エチオピアにおいては、農村の最貧の中で暮らす家族の子どもたちは、教育システムが破綻していて学校に来なくなります。両親は、学校に戻るのか、家にいて生活のお金を稼ぐのか選択することになります。学校に行けば、人生を改善することができます。エチオピアの教授法について話をする時間があまりありませんでしたが、私たちが話をしている原則と関わってくると思います。子どもたちが読み書きができれば、考えることができる、問題解決ができるようになる、そうするとわくわくしてきます。両親、コミュニティーに関わってほしいと思うのであれば、子どもの学習の結果を振り返ることが必要です。結局、振り返らなければうまくいかないと思います。ですので、ここで問題提供したいと思います。教育を変革する方法、そしてコミュニティーや両親が、子どもの学びの変革が起こっているところを見えるようにすることが必要なわけです。そして農村において、学習体験が変わっているのを目の当たりにすれば、保護者や地域社会もコミットすると思います。単にやるだけではなく、エビデンスもあると思います。そして学習体験が違ってきていることを保護者が目の当たりにすることができる、そうすれば希望が出てきて、地域社会もこれをコミットできるようになるだろうと思います。

もう一つ、追加したいことは、これは既に話されていますが、阿部先生がおっしゃったようなかたちで教師が実際に体験しなければ、自分の指導の中で効果的な現実社会の学習です。自分の指導の中で活用できません。効果的にしっかりとした指導をすることができたら教師だけではなく、生徒も違いを目にすることができる。阿部先生は実践していらっしゃると思いますが、体験をすれば現実に落としこむことができ、生徒も学ぶことができる。こういうふうにはやればいいと口で言うだけでは、コミットメントなしでやってしまう。エビデンスとしてもインパクトを与えることができないと思います。ですから、実際に実践している人の例を見て体験することが重要だと思います。そして保護者も違いを見ることができれば、アクティブラーニングというのを見て、それが変革が起こっていることが分かれば、それを受け入れようというようになると思います。

他に質問やご意見はございますか。まだ少し時間が残っていると思いますが。質問でなくても、コメントでも構いません。ご自分の経験を共有いただくのもいいですし、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

○澁谷 和朗（広島大学 特任准教授）

広島大学の澁谷です。今日はありがとうございました。阿部先生が、アフリカのような識字ですとか就学の問題と、アクティブラーニングは段階論ではなく同時並行にできるはずだとおっしゃいました。それに関連して国枝さんに質問ですが、実際にニジェール、マダガスカルのような環境下において、二つの知という中の、知の定着的な部分と、知を批判的に見て創造していくような部分と、知の違った側面を同時並行に、困難な環境の中でやるということが、どのようなかたちをとれば可能なのか。

アクティブラーニングのアクティブやラーニングという話が、単なる高次な知を扱うということではなくて、現実社会にあるメタ認知的な社会と学校とのつながりを考えるということであれば、例えば地域社会が持っている知と学校の知とのつながり、そういったことも含めて、どのようなアクティブラーニングというかと変ですが、知のいろいろな段階の対応が可能かということについてご意見を聞かせてください。

○国枝専門員

澁谷先生、ありがとうございます。非常に難しい質問をありがとうございます。今、私が思っておりますのは、まずアフリカの中でも厳しいニジェールをはじめ西アフリカのフランス語圏アフリカの国で仕事をして、率直に感じていることは、多分、阿部先生のような方がその学校に行って、通訳付きで授業をする、それはその教室にとっては非常に間違いなく素晴らしい授業になりますし、そこでそれを見ている教員や周りの関係者に与えるインパクトは非常に大きいというのは間違いのないと思います。

他方、それをわれわれが広めてくる、つまりわれわれが何か活動するに当たって、どこか一つの学校ですとか、地域内の数校で何かをやろうとしているわけではなくて、それを結局、全国普及しなければわれわれの存在価値はないのではないかと考えて、少なくとも私は仕事に関わっています。そのときに何ができるかということですが、時間軸をどうとるかが一つ課題になると思います。例えば教室内の実践をアクティブラーニングというかたちで変えていくといったときに、それを導入しようと考えてから、実際にそれが教室の中に導入されて、子どもの学びを変えていくために、どれだけの時間がかかるかということを考えてときに、私は専門家ではありませんが、おそらくニジェールなどですと、感覚的には20年かかるのではないかと考えています。そういったときに、まずこれはいいと思うことをやってみて、それをある程度の地域でパイロット活動的にやってみて、ではこれを国のカリキュラムに入れましょと。そしてそれに対応する教材ができ、教員研修がなされ、各学校で実践されて子どもが学べるようになるというところまで考えると、非常に長く時間がかかると思います。

日本であれば10年に1度の学習指導要領の改訂で、効率的にできるのかもしれませんが、アフリカの特に最貧国の問題は、やろうとしたことがまず国の制度に乗るまでに非常に時間がかかる。制度になったとしても今度は決まったことを実施するまでまた時間がかかる、そのための能力強化にも時間がかかるといったときに、われわれが想像しているような

時間軸では物事は考えられないというのは間違いないと思います。

かといって、アプローチが非常に重要であれば、まずは私はやってみて、現地の関係者の反応を見てみるというのは非常に大事だと思うので、そこはやってみると思います。私が申し上げたいのは、本当にそれを普及していこうとすると20年、30年という時間軸で見られるかどうかという覚悟がわれわれにあるのかということ、一つ重要なポイントだと思います。

もう一つは、繰り返しになりますが、そうはいっても今、目の前で増えていく学べていない子どもたちに対して何ができるかを同時並行で考えて実践していく。それがもしアクティブラーニングということであれば、それを実践するということでしょうし、何か他にできることがあればやっていくということだと思いますが、どちらにしても、時間軸をしっかり据えるということと、長期的な視点と今、目の前で起きていることというのにどう取り組むかということ、両方考えるということが大事だと思っています。すみません、答えに全くなっていませんが、非常に時間がかかることなので、どんなにいい効果があるということでも、われわれは二段階論というよりもおそらく同時並行でやっていく。

どちらにしてもいえることは、ここで何かをしないとそれがその先につながることはない、これは絶対に効くというものは今すぐやってみようということだと思います。それはいきなり政策に乗せるということではなくて、それが機能するにはどうしたらいいかというモデルをしっかりとつくってから政策という話だと思うので、そのところを例えば技術協力でやっていくなどが大事になってくるかと思っています。すみません、答えにはなりませんが考えていることの共有です。

○阿部教授

ご質問をありがとうございます。まず二つございます。一つは先ほど二段階論ではないという話ですが、例えばもし識字が不十分だからアクティブラーニングとは無縁だということであれば、例えば日本の小学校でも言葉を学ぶ過程でアクティブラーニング型の授業ができないか。そんなことはないです。まだ漢字や文法が分からない低学年の子どもでも、高学年や中学生、高校生のアクティブラーニングとは違うけれども、低学年なりの探求型の授業はできます。そういう点では、字を覚えてからする、就学率が100%になってからという二段階論では、永遠にというか、いつまでたってもアクティブラーニングは広がらないということ、もう一度強調したいと思います。

二つ目の国枝さんがおっしゃることはそのとおりだと思いますが、それを前提に申し上げると、やはりいろいろな方法でやるしかないと思います。つまり、NGOのような重要な働きの中で働きかけていたり、それからある何かムーブメントを起こしたり、当然国にも直接働きかけたりとか、少なくともアクティブラーニングはいいと理屈で言うだけではだめで、実際のアクティブラーニングの映像をみてもらうとか、何より先ほど申し上げたように、実際のその国の子どもたちにアクティブラーニングができる教師が行って、同

時通訳で授業をしてみて、それを1カ所といわずにある程度継続的にやっていくと、そういうことで動かすとか、さまざまなあの手この手を使いながら、世界の教育を変えていくという戦略が必要ではないか。ですからもちろん国によっては5年10年単位で変わる場合もあるでしょうし、場合によっては20年かかる。でも20年後に変わらないより、ずっと変わったほうがいいわけですから。

日本もアクティブラーニングというのが最近出てきましたが、2017年、もっと前からアクティブラーニングというのは中央教育審議会に出てきましたが、実は1950年代、60年代に日本でも学習集団の授業というかたちでアクティブラーニングに近い授業の研究実践の歴史があります。そういう下地があって、今回アクティブラーニング、主体的多様的で深い学びが、割合にうまく広がりつつあるというのは、日本でも実はこの数年ではなくて、数十年の歴史の中でだんだんと培われてきて、あるときは下火になったり、また盛んになったりということがありますから、そういう意味では諦めないで、あの手この手、さまざまな方法で戦略的に働きかけていくことが必要だと思います。ありがとうございます。

○アチェアポン教授

誠にありがとうございます。先ほど国枝さんがおっしゃった20年、30年かかると2030年のSDGsの目標年を越えてしまいますので、もう少し早めに実現できるように今から何か始めて、より多くの子どもたちに届くようにしたいと思います。

それから阿部先生がおっしゃった政府や行政への働きかけをどうやるか。行政のリーダーシップに対して、そう説得するかが大事だと思います。つまりなるべく多くの教員がそういう授業ができるようにするためには、行政のコミットメント、忍耐、覚悟が必要だと思います。日本の場合は発端としては50年代に始まったと伺いましたが、コミットメントを持てばいずれは広がるかもしれませんが、もちろん政策を変えるというのも重要で、それから教員の養成をして、この方法の採用だけではなく、維持することも大事だと思います。また、インパクトがあるということを示す。アクティブラーニングをある程度の規模で導入すると、子どもの学びが変わるんだということを政策決定者にも見てもらえる、子どもの能力向上に役に立つということもエビデンスを示すことになります。

ですので、なるべく広く導入できるような努力は最初から必要だと思います。当然、抵抗は一部見られるでしょうけれども、結果を早く出す、そして子どもたちは待てません。2030年までに、今からわずか12年後にどうなっているか、私自身も時々、疑問に思いますけれども行動を起こさなければならないと思います。それでは、どうしてもというご質問がなければ、そろそろ次のセッションに移りたいと思いますが、いかがでしょうか。

○黒田教授

一点だけ明確にしておきたい点があります。私が二段階説みたいなことを言ったとおっしゃいましたが、私が申し上げたのは決してそういうことではありません。私は、識字教育

でもそういうアクティブラーニングを実践されている団体も重々承知しております。いろいろな難しい条件の中ではいっぺんにできませんので、ブレークスルーになる一等最初の取っ掛かりはどこに考えたらいいのかについて、お知恵をくださいと申し上げただけであって、教育レベルが低いからアクティブラーニングができませんとか、そんなことを申し上げたことは一切ございませんので、その点だけ申し上げておきます。